

言語表現の基礎を培う 0-2 歳児の絵本の読み聞かせ —講座における親子への支援をとおして—

砥上 あゆみ⁽¹⁾ 菅原 亜紀⁽²⁾

Reading picture book stories for from 0 to 2 years
old children to cultivate their language foundation
—Through support for parents and children in the
course—

by
Ayumi TOGAMI Aki SUGAHARA

1. 本研究の課題と目的

近年、絵本の読み聞かせは4ヶ月の乳児では6割¹⁾、2歳児の幼児では9割の子どもが体験をしているといった調査結果²⁾があり、子どもの育ちにおいて身近なものとなっている。絵本の読み聞かせは「行動選択の自由が各家庭に委ねられている社会文化的な行動³⁾」であるが、子育て家庭において乳幼児における読み聞かせへの関心は高まり、絵本は重要な児童文化財のひとつになっているといえる。

絵本の読み聞かせに関する取組は、活発になされている。2001年より開始されたブックスタート運動は、2016年には979市町村が実施⁴⁾している状況にある。その運動の目的は、乳児とその親が絵本を媒介としてふれあい、楽しさを共有することであり、絵本は“読み聞かせ”ではなく“分かち合う”ものとされている。絵本を介して親が乳児へ優しく語りかけ共に過ごす時間を自然に創り出すということから親子の交流が深まることに重きがおかれている。また、絵本の読み聞かせが子どもの言語の発達を促し、豊かな心を育むことや親自身の心が安らぎ、育児不安の解消の一助となるものとしても期待されている。

「子どもへの読書推進計画」⁵⁾においては、子どもの生活環境の変化や幼児期からの読

受理日 平成28年 10月 31日

(1) 純真短期大学こども学科 助教

(2) 純真短期大学こども学科 助教

書習慣の未形成などにより子どもの「読書離れ」が指摘されている。乳幼児の絵本の読み聞かせ体験が自主的な読書活動へと結びついていくように、子ども自身が読書を楽しむことを目的とした発達段階に応じたきっかけづくりが大切となり、家庭での読み聞かせの重要性があげられている。また、乳幼児への読み聞かせが結果として学力向上や読書が好きになる等、子どもの育ちを継続的かつ長期的な視点で捉えていることがわかる。絵本の読み聞かせの目的は、言語の獲得、情操を育む等の子どもの育ちに関すること、親子の交流を深める等の親子関係に関すること、さらに親が子育てにゆとりをもてるようになることや子どもの育ちに気づく等の親自身に関することと非常に多岐にわたっている。

子どもの育ちにおいて乳幼児への読み聞かせの重要性はこれまでも述べられており^{6) 7)}、そのことは親も認識している。絵本の読み聞かせにおける親の考えは、親子のふれあい、親子で楽しむ時間という内生的意義^{注 2)}や文字を覚えるなどの知識の獲得という外生的意義^{注 3)}、また静かにさせる、寝かせつけるなど子育ての手段として読み聞かせ固有の外生的意義があることが明らかにされている⁸⁾。また、絵本を媒介とした母子間のスキンシップやコミュニケーションの深まりは乳児の心理的安定にもつながっている⁹⁾。このように、絵本の読み聞かせの目的は多様であり、親の考えや場面状況が大きく反映されている。そのため、家庭における子どもたちの読み聞かせ体験の質は幅広いものとなっているといえる。

本研究の対象となる絵本の読み聞かせ講座の参加者のなかには、絵本を介して子どもとのコミュニケーションを深めたいという考えをもっているものの、実際には、絵本の中の一つの言葉を繰り返し言う、質問を何度もするなど言語の獲得に結びつくような読み聞かせの方法をとっていることがある。絵本の読み聞かせに対する親の考えを示した藪中・吉田¹⁰⁾は、実際にどのような読み聞かせが行われているかが明らかにされていないことを指摘している。そこで、実際の親の読み聞かせ方法に着目し、親の読み聞かせの現状を示すことが第一の課題である。また、絵本の読み聞かせが親子の交流を深め、親自身の子育てへの不安を緩和させることにつながっていくのであれば、0～2歳児における読み聞かせの目的と実際の読み聞かせ方法を結びつけることが必要となってくる。そこで、読み聞かせの講座においてどのような支援が必要となるのかを明らかにすることが第二の課題である。

以上のような検討を踏まえて、本研究では、講座に参加している親自身の読み聞かせに関するアンケート調査と実際の読み聞かせ方法からその現状を示し、0～2歳児における絵本の読み聞かせの目的と方法、読み聞かせ講座における支援のあり方を検討する。

2. 研究の方法と結果

読み聞かせをする親自身が認識している読み聞かせの目的と実際の読み聞かせの方法が異なることがある。そのため、本研究ではアンケート調査及び実際の読み聞かせ場面と親からの質問を分析の対象とし、読み聞かせの現状を示し、支援のあり方を検討する。

(1) アンケート調査について

① 調査対象

本調査は、平成 28 年 6 月に「絵本とともにのんびり子育て」講座を受講した親 8 名と

平成 28 年 9 月に同講座を受講した親 9 名の計 17 名、0 歳児～2 歳児の子どもをもつ親を調査対象とした。

②調査内容

アンケート調査は回答に対する限定が少ない自由記述式で行う。調査の内容は、家庭での絵本の読み聞かせに関する質問 5 項目で構成した。倫理的配慮として、個人が特定されないように無記名とし、研究の目的以外に使用しない旨を文章で明記し、口頭でも協力を依頼した上で講座開始前に記入してもらった。質問を以下に示す。

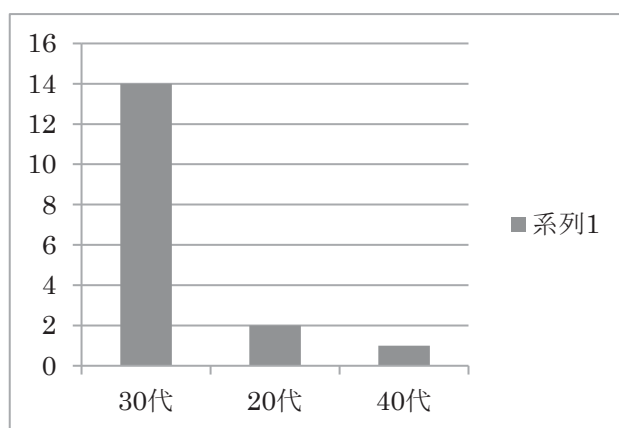
- ・親の年代と子どもの年齢（月齢）、兄弟の有無
- ・絵本選びのポイントについて
- ・どんな時に絵本の読み聞かせをするのか
- ・絵本の読み聞かせの頻度について

「毎日」「週 2, 3 回」「週 1 回」「月 1 回程度」「ほとんど読まない」の 5 項目より一択

- ・絵本に期待していることは何か

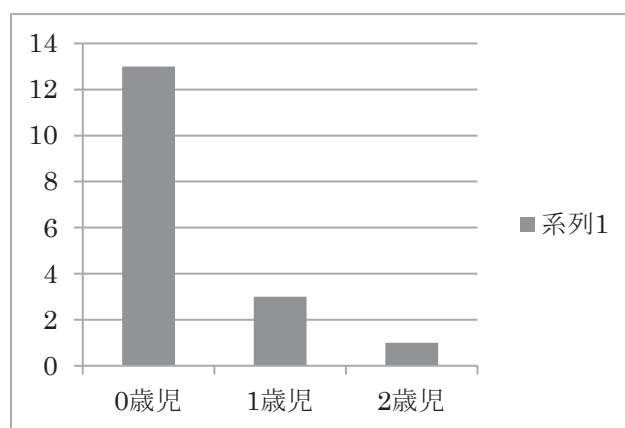
（２）アンケート調査の結果

①－１ 回答者の年齢



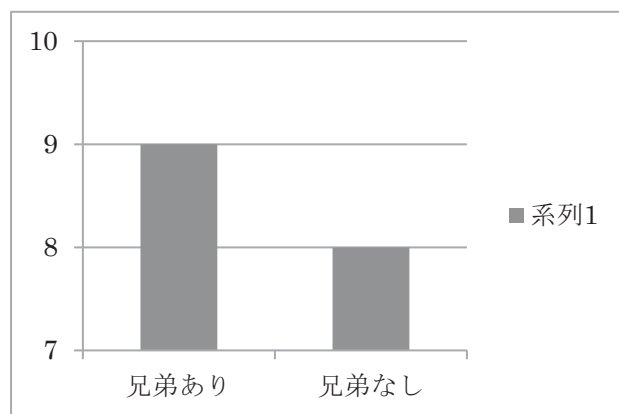
30 代が最も多く 14 名、20 代 2 名、40 代 1 名

①－２ 参加している子どもの年齢



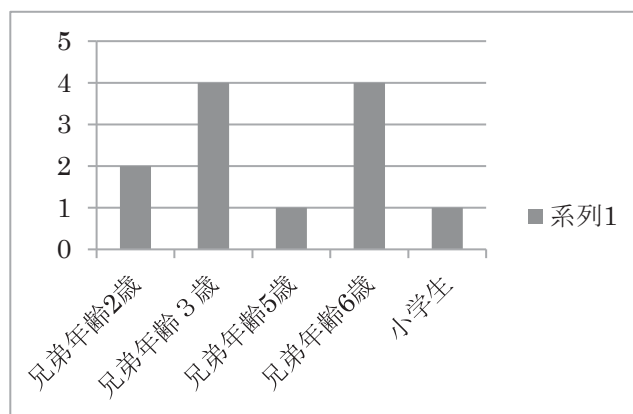
0 歳児が 13 名、1 歳児が 3 名、2 歳児が 1 名

①－３ 兄弟の有無



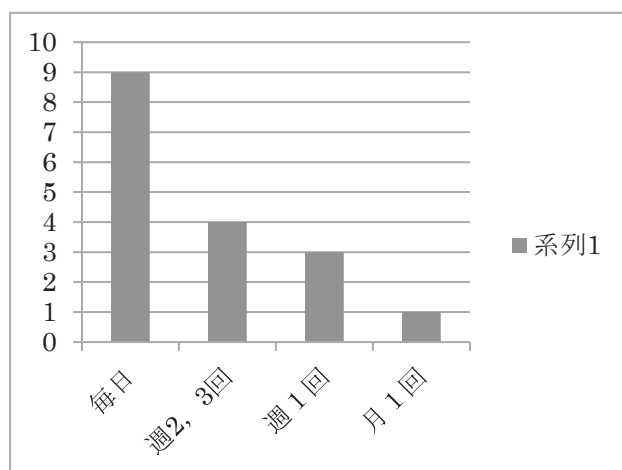
兄弟ありが 9 名、兄弟なしは 8 名

①－４ 兄弟の年齢



兄弟の年齢は、2 歳 2 名、3 歳 4 名 5 歳 1 名、6 歳 4 名、小学生 1 名

② 読み聞かせの頻度



読み聞かせの頻度は、「毎日」と答えた親が半数以上であった。週 2、3 回と週 1 回も合わせると 9 割を超え、週に 1 回以上は読み聞かせを行っていることがわかった。日常の子育ての中で、絵本が頻繁に活用されていることがわかる。

③ 絵本選びのポイントについて

絵本選びのポイントに関して、記述内容の類似性に基づき整理した結果、下記のように 5 つのカテゴリに分けることができた。カテゴリ名を【】で表記する。

【教育的期待】	<ul style="list-style-type: none"> ・「おやすみなさい」や「はみがき」につながるもの ・大切なものがわかりやすい話
【子どもの興味・関心】	<ul style="list-style-type: none"> ・子どもが興味をもったもの
【子どもの発達段階】	<ul style="list-style-type: none"> ・字が少ない/絵が大きい ・色や絵のわかりやすさ/わかりやすい絵と話
【親の好み】	<ul style="list-style-type: none"> ・昔読んだことがあるもの/私の好み/私が面白いと思うもの ・絵がかわいい/カラフル/色合い/かわいい ・字が少ない（読み聞かせが楽）
【世間の評価】	<ul style="list-style-type: none"> ・人気がある/売れ筋のもの/帯の評判やコメント

本講座の対象児は 0 歳児～2 歳児であるため、基本的な生活習慣を身につけることに直結するようなものを選んでいられると考えられる。また、心の教育など親が期待するものを自然と身につけるためのツールとして絵本を選んでいる。【子どもの興味・関心】に係る回答は少なかったが、【子どもの発達段階】に考慮した絵本を選ぶことで子どもが絵本に興味を示しやすくなることから、これも子どもの興味・関心を引き出すための絵本選びのポイントにつながっている。また、「私が面白いと思うもの」「字が少ない」などの親の好みに関する

るものもあり、親自身も楽しみながら読み聞かせをしたいという思いや親自身が楽しんでいる様子が見られる。また、「売れ筋のもの」「人気があるもの」という回答がある。どのような絵本を選んでいいかわからず世間の評判を参考にしている親の姿からは、世間の評価に安心感を得ているともいえる。また、「字が少ない」絵本を選ぶ理由として、子どもの発達を考慮した場合と読むのが楽という親側の都合があげられている。このように、全く異なる回答がみられたことも興味深い結果である。

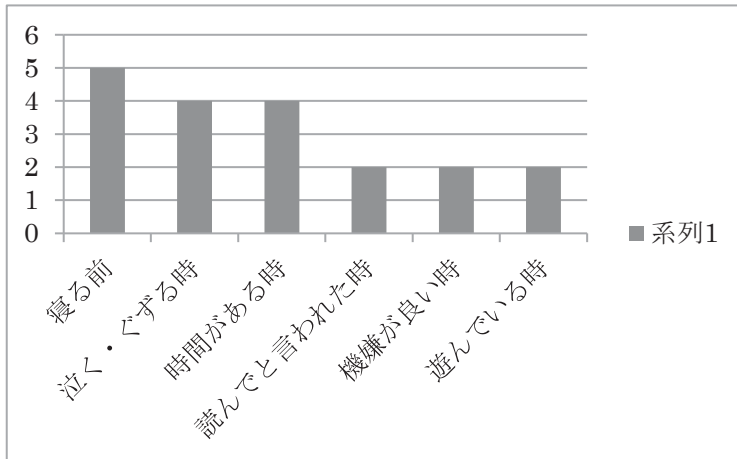
④絵本に期待していることは何ですか？

絵本に期待していることに関して、記述内容の類似性に基づき整理すると、下記のように5つのカテゴリに分けることができた。カテゴリ名を【 】で表記する。

【親子の時間】	<ul style="list-style-type: none"> ・楽しい時間/幸せな時間 ・子どもの笑顔/笑顔になること
【育ちへの期待】	<ul style="list-style-type: none"> ・本を好きになってくれる ・心が豊かになる/心の成長/心の教育/情緒の安定
【教育的期待】	<ul style="list-style-type: none"> ・想像力/創造力/集中力 ・頭がよくなる/字を覚える/いろいろなことを知る ・自分で読むようになる
【興味・関心】	<ul style="list-style-type: none"> ・ファンタジーの世界へ興味をもつ ・子どもの反応
【子育てのツール】	<ul style="list-style-type: none"> ・安らいで寝るための準備

絵本の読み聞かせを【親子の時間】として楽しみ、子どもの喜ぶ姿を期待することからは、読み聞かせが単なる読んで聞かせるものではなく、親子で交流し分かち合うものであると親が捉えていることがわかる。そして、絵本の読み聞かせの過程で生じる喜びや何かを感じ学ぶことで、将来、本を好きになり心豊かに成長してほしいという親の願いがあるといえる。さらに、絵本をとおして想像力や集中力などを身につけること、字を覚えることや長期的な視点で成績がよくなるというような教育的効果にも期待をしている。ただし、読み聞かせの過程で生じる親子の交流など内生的意義を重視している親と文字や知識などの外生的意義を重視している親がおり、期待する内容には個人差がある¹¹⁾ように、親によって何を重視しているのかは異なる。また、絵本を選ぶ際には親の好みを重視していても、親が安らぐ、楽しむなど親自身に関する期待は回答としてはあがってこなかった。これは、藪中・吉田¹²⁾が指摘するように、絵本の読み聞かせの目的を問われたときに親がまず考えるのは、子どもへの直接的な影響であり親自身に影響を及ぼすものとはとらえられていないということがいえる。

⑤読み聞かせはどんな時にしますか？



読み聞かせを行う時は、「寝る時」が 5 名と一番多く、「次いで泣く・ぐずる時」「時間がある時」が 4 名、「読んでと言われた時」「機嫌が良い時」「遊んでいる時」が 2 名ずつであった。読み聞かせを親子の時間として楽しむという期待があるものの、実際の読み聞かせ場面は、子どもが泣いたりぐずったりする時が多く、子どもから読んでと言われた時と回答した親は 2 名であり、子どものニーズに合わせた絵本の読み聞かせ時間にはなっていないこともある。絵本は、泣いている子どもの気をそらすため、ぐずっている子どもを落ち着かせるためといったツールになっており、親が考える絵本を楽しむ時間という期待とは矛盾したものになっている。しかし、絵本の読み聞かせをすることで子どもが落ち着くということは、子どもにとって心地よい時間となり得ているということもいえる。

このアンケート調査の結果から、子育て家庭において絵本の読み聞かせは頻繁におこなわれていること、絵本の読み聞かせをとおして子どもの育ちを期待していることや親子の楽しい時間として捉えている親の考えが明らかとなった。また、実際の読み聞かせが、読み聞かせ固有の外生的意義を重視した子育てのツールとしての役割になっていることもわかる。

(2) 実際の読み聞かせの方法

絵本の読み聞かせに内生的意義を感じつつも、その方法は外生的意義となっていることがある。そこで、平成 27 年度 (5 ヶ所)、平成 28 年 9 月 (2 か所) までに絵本の読み聞かせ講座に参加した親の読み聞かせ方法や質問をまとめる。アンケート調査では表出しない親の考えを示していくため、支援者^{注 4)}から見た親の読み聞かせ方法と読み聞かせにおける親からの質問に着目する。絵本の読み聞かせが、聞き手である子どもだけではなく、読み手である大人にも影響を与える相互作用をもったコミュニケーションである¹³⁾ことを踏まえ、実際の読み聞かせ場面における親の姿、子どもの姿、親子関係について叙述する。

① 読み聞かせ場面における親の姿

実際の読み聞かせ場面において、子どもが選ぶ絵本よりも親自身が読ませたい絵本を「こっちがいいよ」と子どもに勧める姿や絵本のなかの絵の色を何度も言葉で繰り返すといった知識を教えるためのツールとして活用している姿がみられた。

絵本の読み聞かせに関する親からの質問では、読み聞かせの体勢や時間、絵本の内容にとどまらず、子どもの言い間違いを指摘しなければならないという考え、読んだ絵本の冊数を重視している様子がみられた。このような質問の背景には、知識や言語の獲得を目的とした外生的意義を重視した読み聞かせになっていることや絵本の読み聞かせは「こうしなければならない」という親の思いを垣間みることができる。また、就寝前の読み聞かせを毎日1時間しているような現状もあり、親自身の疲弊につながっているケースもあった。子どものための読み聞かせという思いから、親にとっては必ずしも楽しい時間だけにとどまっていないこともわかる。

② 読み聞かせ場面における子どもの姿

親から見た絵本の読み聞かせに関する気になる子どもの姿としては、絵本をなめたりくわえたりする、並べたり積んだりして遊ぶ等、絵本の使い方に関することがあげられた。また、順番通り絵本をめくらない、絵本に興味を示さない、年齢に相応しない難しい絵本を好む、同じ絵本を読みたがる等の子どもの姿に親が心配になっている様子がある。絵本の読み聞かせをこうすべきだと規定してしまうと、それに応じない子どもの姿に親は不安になる。さらに、知的側面における絵本への教育的期待が高まると、発達に沿った反応がみえないと焦りにもつながっていくことも窺える。

③ 読み聞かせ場面における親子関係

絵本の読み聞かせの効用は、コミュニケーションが増加し、幼児期の親子のコミュニケーションの改善をもたらすこと¹⁴⁾や母子間のスキンシップやコミュニケーションを深めている¹⁵⁾ことが明らかになっている。絵本の読み聞かせについて親から相談された内容を事例①として示し、この事例から絵本の読み聞かせを介した親子関係の深まりを後述する。この事例は、4歳児ではあるがこれまでの読み聞かせ体験の蓄積があると考えられる。

事例① 絵本を介して親との交流を求める幼児 B (4歳児)

絵本を保護者にところにもってきて、絵本の読み聞かせをするよう要求する。絵本を広げると保護者の膝の上に座り体を寄せてくる。しかし、ページはざっとめくるだけで絵本は聞かない。この行動を繰り返し行う。読む側である親は、「なんで絵本を読んでもと持ってくるのに聞かないのか」と、その行動をみてイライラしてしまう。

この内容から、絵本を介して保護者とのスキンシップを求めている子どもの様子が窺える。これまでの絵本の読み聞かせの時間が、幼児 B (4歳児)にとって、親子の交流となり快の体験となり得ていることがわかる。しかし、親の認識としては幼児 B の目的は絵本を読んでもらうことと捉えているため、読む側の親はイライラしている。そこで、幼児 B の思いや読み聞かせが親子の交流を深めていることを伝え、親は子どもの行為を肯定

的に捉えることができた。絵本の読み聞かせが自然と親子の交流を深めているものの、絵本の読み聞かせが親子の交流につながっているということに気づいていないのである。そのため、親が絵本の読み聞かせにおける内生的意義に気づく機会を設けることも必要である。

(3) 読み聞かせ場面における支援者の役割

講座に参加している親子との関わりをとおして支援者としての役割を考えるため、幼児（1歳児後半）と支援者との関わりを事例とし、読む側の大人と聞く側の子どもが相互に影響をうけるということを示す。

事例② 家庭では絵本に興味を全く示さない幼児 A

幼児 A は、自ら興味をもった絵本『たべたのだあれ』¹⁶⁾ を手に取り、支援者に渡す。そして横に座り読み聞かせを始める。絵本の中には、「たべたの、だあれ」の言葉の繰り返しがある。その問いに対し、幼児 A は絵を指さし、支援者は「そうね」と応答する。この応答的な関わりを、終始、行うようにする。一度、読み終わると「もう 1 回」と幼児 A は要求する。そこで、同じ絵本を 3 回読み、最後に「これが最後」と伝え、読み聞かせを終える。

家庭では絵本の読み聞かせに興味を示さない幼児 A が絵本に興味を示す、繰り返し絵本を見る・聞くといった姿に保護者は驚いていた。この実践のポイントとなるのは、まず、子どもが選んだ絵本であること、読み聞かせをする側の応答的な関わりと幼児 A の発言を否定せずに受けとめていることにある。このように自分の思いや感じたことを表現ができる・表現する体験の積み重ねは、言葉の芽ばえの時期である 0.1.2 歳児にとって言語の獲得の基礎となっていく。

絵本の読み聞かせには、読む側の要因、聞く側の要因、絵本そのものの要因が影響している¹⁷⁾。つまり、事例②からは親自身の絵本の読み聞かせの目的やその方法によって、子どもの姿が変わってくる可能性を示唆している。1 冊の絵本に興味を示し同じ絵本を繰り返し読みたいという子どもにとって、冊数を重視し次々に絵本を変えて読み聞かせをおこなうと、絵本に興味を示さなくなる場合も考えられる。また、読む側が選択した絵本を優先してしまうと子どもの「その絵本が読みたい」という欲求は満たされないままになってしまう。つまり、絵本の読み聞かせの目的とその方法が結びついていることは非常に重要なことであることがわかる。

3. 考察

秋田・無藤¹⁸⁾ は、絵本の読み聞かせについて「空想したり親子のふれあいをする」と「文字を覚え、文字を読む力や生活に必要な知識を身に付ける」という 2 種類の意義を示している。また、藪中、吉田¹⁹⁾ は、0 歳児（乳幼児）への読み聞かせの意義として「感性が育つ」、「親子の絆が深まる」、「子どもが本を好きなる」ことを示している。さらに、

読み聞かせの過程で生じる内生的意義を重視していることを言及している。今回のアンケート調査でも、親は内生的意義を目的としていることがわかる。しかし、実際の読み聞かせ方法に着目すると、必ずしも内生的意義を重視しているものになり得ていないという結果となった。これは、非常に重要なことである。内定的意義を重視した読み聞かせをおこなうと、子どもが変化する。つまり、子どもの欲求や興味に合わせた共感的な読み聞かせをしてもらうことで、子どもは満足し安心感を得ることができ、親子の交流を深めることができる。さらに、読み聞かせの時間が子どもにとって心地よい時間となることで、絵本に対しての興味や関心も育まれると考える。また、そのような子どもの変化から、親がもっている不安や心配が緩和され、喜びにつながることもある。一方で、読む側の親の意向や外生的意義を重視してしまうと、読み聞かせの時間が楽しいと感じることができず子どもの興味は失われていってしまう。だからこそ、絵本の読み聞かせの目的とその方法を結びつけていく必要があり、そのためには講座において次のような支援が考えられる。まず、親自身が絵本の読み聞かせが親子の交流になっていることを意識化する機会を設けることや親にとっては疑問に感じる子どもの行動を子どもの代弁者となり伝えていくことが必要となってくる。また、言葉の芽生えの時期である 0～2 歳児の子どもが安心して自己を表現できる内生的意義を重視した読み聞かせの方法や応答的な関わりをモデルとして示すことが大切となる。

徳永²⁰⁾は、読み聞かせの実践をとおして、子どもの発達段階に合わせた絵本の読み聞かせと絵本が子どもの心と言葉の育ちに深くかかわっていることを示している。6ヶ月の乳児も、大人の声と表情に反応しコミュニケーションの場をつくり、喃語で自分の思いを伝える。この自分の思いを表現したい、したくなる環境こそが、言語表現の基礎となり得る。言葉の芽生えの時期である 0～2 歳児においては、言語表現の基礎である自己表現ができる安心感があるということが根本となる。これを基盤として、コミュニケーションの楽しさ、心地よさを感じ、伝えたい、もっと知りたいという思いが育まれる。そのためには、0～2 歳児における読み聞かせは親子がふれあい、楽しい時間をわかちあう内生的意義を目的とすることが大切である。その方法として、子どもの安心や心の安定につながるように応答的・共感的な読み聞かせが必要となる。それが、3.4.5 歳児の言語の獲得の過程にある「文字が読めるようになる」、「書き言葉への関心」等の外生的意義を見出していくことにもつながっていく。つまり、絵本の読み聞かせの一側面として、内生的意義を重視した読み聞かせが結果として外生的意義に結びついていくというプロセスがあるといえる。

4. 本研究の成果と課題

子育て家庭において、絵本は身近な児童文化財であり日常的に活用されている。しかし、絵本の読み聞かせということだけに関心が集まり、その目的や方法がわからないまま読み聞かせをおこなっている親が多い。そのため、内生的意義を重視したいという意向があるのに外生的意義を重視した関わりとなり、そのことに気づいていない現状が表面化した。絵本の読み聞かせにおいて親が内生的意義を感じつつも、その方法は外生的意義を重視した関わりになっているという点に着目し、そのことが浮き彫りになったことは本研究の成果といえる。

また、絵本をたくさん読まなければいけないなど「読み聞かせはこうあるべき」と考えていることや言葉をたくさん覚えた等の知的側面にも親の期待が大きいことがわかる。そこには、絵本の読み聞かせの成果への評価も深く影響していると考えられる。なぜなら、読み聞かせの成果として言葉を覚えた、色の違いがわかるようになったことなどは目に見えやすく評価しやすい。一方、内生的意義である交流の深まりや心理的安定等は、評価しづらく、また気づかない場合もある。しかし、乳幼児の頃に母親から読み聞かせをしてもらった経験のある児童生徒は 9 割²²⁾ といった調査結果もあるように、乳幼児の絵本の読み聞かせの体験は、子どもの記憶に残っている。子育て家庭への支援が求められる昨今、絵本の読み聞かせの時間が親子にとって心穏やかに過ごせる時間となるよう、我々専門家が働きかけていく必要がある。なぜなら、絵本の読み聞かせと子育ての方法は深く結びついていると考えられる²¹⁾。そうであるならば、絵本の読み聞かせをとおして、子どもとの共感的な関わりを体験し、親子関係が良好になることで、日常の子育てにも汎化されていく可能性があるのではないか。

本研究の課題としては、講座は 1 回のみであり、その後の親子の変化をみることができなかった。そのため、継続的な研究をすることも視野にいれていく必要がある。また、アンケート調査において、同じ回答の中にもその理由が二分していることがあることがわかったため質問項目の精査も必要となる。今後も、絵本の読み聞かせの講座における時間が親子のやすらぎの時間となるように努めていきたい。

【注と引用文献】

注 1)

対象の講座は、福岡市南区が企画している南区出前講座（大学版）の中の一つである。大学のもつ専門的な知識を地域の方々の役に立てるということを目的に、平成 28 年度は 38 テーマの講座が準備されている。この 38 テーマの中の一つである本講座は、「絵本とともにのんびり子育て」という題目で、対象は 0 歳~2 歳のお子さんとその保護者である。受講料は無料。38 テーマの中から興味のある講座を選ぶようになっている。希望者は区に 20 人前後の団体もしくはグループで申し込みを行う。開催場所は、主に公民館や福祉センターなどである。

注 2) 注 3)

秋田・無藤を参照し、読み聞かせをとおして生じる親子のふれあいや子どもの安らぎ・安心感などを内生的意義とし、文字を覚えるなどの知識や言語の獲得などを外生的意義とする。また、早く寝かせつける手段として読み聞かせを行うなどを読み聞かせ固有の外生的意義とする。

注 4)

支援者である砥上、菅原は、保育士資格を有しており、保育園での現場経験もある。そのため、子どもの発達理解、親支援・親子関係への視点をいかして読み聞かせ行動を捉えることができると考える。

(1) 薮中征代・吉田佐治子 (2010) 乳児をもつ養育者の絵本に関する考えと環境についての考察. 聖徳大学研究紀要, 20. 41-48

(2) 駒井美智子 (2011) 保育園児の保護者を対象とした家庭内における絵本の利用状況に関する調査. 東京福祉大学・大学院紀要, 2 (1). 23-29

(3) 秋田喜代美・無藤隆 (1999) 幼児への読み聞かせに対する母親の考えと読書環境に関する行動の検討. 教育心理学研究, 44 (1). 109-120

(4) NPO ブックスタート 実施自治体一覧 <http://www.bookstart.or.jp/about/ichiran.php> (最終アクセス 2016.10.31)

(5) 文科省 (2013) 子どもの読書活動の推進に関する基本的な計画

(6) 徳永満理 (2002) 絵本で育つ子どものことば. アリス館

(7) 河合隼雄・松居直・柳田邦男 (2001) 絵本の力. 岩波書店

(8) 前掲 (3)

(9) 前掲 (2)

(10) 薮中征代・吉田佐治子 (2014) 子どもへの絵本の読み聞かせに対する親の考え—0 歳児, 5 歳児, 小学 2 年生の比較を通して—. 聖徳大学研究紀要, 25. 47-54

- (11)前掲(3)
- (12)前掲(10)
- (13)前掲(10)
- (14) 川井 薫栄・高橋美和子・古橋エツ子 (2008) 絵本の読み聞かせと親子のコミュニケーション. 花園大学社会福祉学部研究紀要, 第 16 号. 83-96
- (15) 前掲 (3)
- (16) 五味太郎 (1977) たべたのだあれ. 文化出版局
- (17) 近藤不里・辻元千佳子 (2006) 絵本の読み聞かせに関する基礎研究と ADHA 児教育の応用 (1) -研究の展望と本研究の課題
- (18)前掲 (3)
- (19)前掲 (10)
- (20)財団法人日本経済研究所 (2004) 親子の読書活動等に関する調査
- (21) 前掲 (6)
- (22) 斎藤有・内田伸子 (2013) 幼児期の絵本の読み聞かせに母親の養育態度が与える影響: 「共有型」と「強制型」の横断的比較. 発達心理学研究, 24 (2). 150-159